



ハッピーアワー

作詞・作曲・原案：左京めぐみ
原作：TANAKAN

ハッピーアワー

「シーン1 前奏黒電話。」

部屋の外で蝉が鳴く。
私はこの狭い古ぼけた部屋の中から外を見た。
縁側の少し傾いた陽の光が、嫌が応にも私を包む。
辺りはすっかり機械の塊、
年号もすっかり移り変わって
大正浪漫は終わりを告げた。
街並みこそ昔のままではあるけれど
変わる周りに取り残されて
私はまだ独り、夢の中に取り残されている。
ガラスのグラスに酒を注ぐ。
それに口をつけ呑み干しながら、
私はこの世の不条理に反吐を吐いた。

黒電話が煩わしく鳴る。
その音は酷く煩わしくて、私は眉をひそめた。
放っておこうかとも思ったけれど
気が付くと不思議と右手は受話器に触れていた。
受話器に耳をつけると聞き慣れない声がある。
男の声だ。
古ぼけたこの街には似合わない
綺麗な東京弁。
「今宵の夕暮れお迎えに。花嫁衣装の御用意を」
私は訳も分らず聞き返す
「どちら様？」
「そんなことはどうでもよろしい。お狐様の嫁入りです故。
御身を捧げてくだされば」
男が言うのも終わらずに私は受話器を置いた。
なんてことない。ただの悪い夢だ。
ガラスのグラスの酒をもう一度呑み干す。
なんてことない。ただの白昼夢だ。

「シーン2 1番消える泡」

畳に項垂れ本のページをめくる。
さっきの電話の事など、頭の片隅に置いて。
それでもそれは私の小さな頭から
離れることは決してなかった。
私は本を閉じ、グラスの酒を煽る。
所詮、なんてことない。
何かの悪い冗談だ。

私は立ち上がって、煤けたタンスを開けた。
今ではすっかりと洋服も増えた。
所狭しと色取り取りと、並ぶそれらにそっと触れる。
その中から一つ手に取る。
幸せな時間の中で買った1枚の白いワンピース。
スカートがほんのり膨らんでいる。
それを手に取り体の前で合わせてみる。
姿見を覗きながら少し回ってみた。
それに合わせてスカートが膨らみ、そして揺れた。
それでも私はひとりぼっちだ。

そして目を閉じてみる。
頭の中では1人森の中、
薄暗く霧が辺りを包む。
そこで誰かに叫んでみても、
どこかの誰かを呼んだとしても、
誰もそれには答えない。

我に返って、洗濯をした。
心の何かも洗われる。
そんな気がしてしゃぼんを見つめる
しゃぼんが浮かんで空に消え、
それを追いかけて右手を伸ばす。
幸せな時間は泡となって消えた。
しゃぼんを追いかけて伸ばした右手を
そっと降ろして目を伏せた。

しゃぼんを見つめて思い出すのは幸せな日常。
しかし頭の中に浮かぶのは、
どこかは分からぬ長く並んだ赤い鳥居、狐の面、
そこに迷い込んだ自分。
来ているのは白いワンピース。
スカートは膨らんでいる。

「シーン3 2番消える日常嫁入り支度」
私は再び部屋の中で項垂れていた。
いつか望んだ夢さえも、
きっと叶うことなど無いのだろう。
そっと臍の下をなでる。
おもむろに私は人差し指の爪を立てそれを突いた。
赤い筋が一本流れる。
そんな気がした。
命など所詮こんなものだ。

ふと目を上げると、いつもの部屋と違って見える。
まだ昼過ぎだというのに、
ついさっきまで明るいはずだったのに、
部屋の外の太陽はまだ明るい。
しかし部屋はボンヤリ暗く、
まるで朝焼け前のような。
薄い青色に沈んでしまったような、
そんな色で包まれていた。
酒を煽ろうとグラスに手をのばす。
徳利とグラスがお神酒と白い御猪口となっている。
徳利の横に置かれたシェイクスピアの新刊は、
朽ち果てそうになっていた。

私は気味が悪くなり、急いでタンスに飛びつく、
そこにも私の日常の一部が在るはずだ。
タンスを開けると、所狭しと並んでいた着物も洋服も姿を消している。
代わりに在るのは白いワンピースと狐の面。
私はタンスをすぐに閉め、
視線の先からそれらを消した。

悪い夢だきっと。
なんてことのない。
首を振って掻き消そうとした時、
一瞬、人の視線を感じた。
いや人かはどうかわからない。
誰かが私を見つめている。
少し迷って後ろを振り向く。

そこには狐が立っていた。
よく見ると狐の面をつけている。
しかし、それは人の其れでは無かった。
其れは身なりを整え、スーツを着込んでいる。
だからと言って、人とは思えない。
狐の面の男がこちらを見ている。

「電話を切ってしまうなんて、なんと酷い。
無礼と知りつつ直接お迎えにあがりました故。
いやいや無礼ははお互い様か。お気になさらず。お互いに」
身の丈、六尺程もありそうなその狐は、
腰に手を当ておずおずと礼儀正しく頭を下げた。
私は、狐を見つめた。狐も私を見つめている。
「さあ。然程に時はありません故、こちらに」
そう言って、私に視線を合わせるように狐は前屈みになる。
狐は手をそっと私に伸ばした。
一瞬私は躊躇った。
そして私はしゃがんだままに手を伸ばし、
その手を掴んで目を閉じた。
身体中が突き刺すような冷気に包まれる。
目を開けると竹やぶの中にいた。

着ていたはずの着物はなく、
私は白いワンピースを着ている。
足元には狐の面が落ちていた。
訳も分からず連れてこられて、
また私はひとりぼっちだ。
頭を掻き耷り、
地団駄を踏み叫ぼうとも、
そこでも誰も答えなかった。

「シーン4 間奏 狐の嫁入り」
なんとか逃げ出そうと、辺りを歩いている。
幾つも並んだ鳥居を抜けて私は歩いた。
登っていたと思えば直ぐに降り、
降りていたと思えば直ぐに登った。

私は辺りを見渡しながら歩く。
狐は私に寄り添ったかと思えば消え、
道を進んだ先に居たかと思えば姿を消し、
そして私を追い越して行ったかと思えば、
また後ろから現れた。
紛れもなく私は化かされていた。

石の鳥居に辿り着く。
すっかりと体は冷え切っていて、
私は弱ってしまっていた。
まっすぐと背筋を伸ばすこともできない。
そこには狐が待ち受けている。
そして私に問いかける。
「楽しめましたか？」
私は首を振る。
狐は口に手を当て、クスクスと笑う。
「夢を見たかったのでしょうか？幸せな夢の中に居たかったのでしょうか？」

私は少し目を伏せ頷く。
「もしあなたが夢を望むなら」
狐は再び手を私に差し伸べる。
私は戸惑いながら、
狐に少し惹かれながら、狐を見つめた。
「幸せな時間の中へ連れ去ってあげましょう。」
私は頷いて、狐に手を伸ばす。

手を取った瞬間、私は小さな鳥居が所狭しと積まれた場所にいた。
ゆっくりと見上げると注連縄で結ばれた白い石と
大きな樹木が目の前にあった。
ここで別れてしまったら
また独りだ。
台風イッカのように、
一切合切何もかも
消えてしまうのだろう
私はゆっくりと目を閉じた。

「シーン5 最期のサビ 廻る日常」
再び目を開けると、私は元の部屋にいた。
何も変わらぬ元通りの部屋に。
酒も本も元通りになっている。
急いでタンスを開けてみた。
視線の先は前と何も変わらない。
何も変わらぬ日常だった。
私はその場に座り込んで、
グラスに残った酒を煽る。
そしてどこか寂しさを感じながら外を見た。
相も変わらず虫の音が聞こえる。
私はため息をついて、
もう一度それを眺めながら酒を煽った。

そして再び電話は鳴り出す。
煩わしくも感じながら私は手を伸ばす。
その横には狐の面が置かれていた。